朱元璋傳

吳晗著

一九四九年八月　生活・讀書・新知三聯書店
B6判三〇一頁　寫眞四種　地圖三葉

著者が戰前から元明時代、特に明朝初期の時代を專攻した學者であることは周知の事實であるが、その二十年來發表してきたモノグラフの結集として著されたのが本書である。

後記によれば、本書はもと民國三十二年に書かれ、勝利出版社から「明太祖」と題して出版されたものであるが、これは甚だ意に滿たず、三十六年から七年にかけて書きなおされたという。その結果分量は殆ど倍加し、更に五百條に上る註を加え、觀點もすつかり變つたという。筆者の任務は、紹介と同時に批評をもしなければならないのであるが、著者の多年研鑽の成果たる本書に對して、淺學の筆者が批評するなど思いもよらない。そこで以下內容を簡單に紹介

しながら、時に望蜀の言を挾むことで責をふさぎたい。

本書は六章に分れ、前三章は朱元璋の生い立ちから、立身の過程を順を追つて敍述し、後二章では皇帝としての統治術について述べ、最後の一章で家庭生活など、個人的な面について記してある。巻末には一三二八年（元璋生）から一三九八年（元璋卒）に至る年表が附錄されている他、巻頭には元璋像二種、馬皇后像、元璋の手蹟の寫眞を載せ、本文中には「元末群雄割據圖」「明九邊七行都指揮司及明初諸王圖」「大明帝國初期疆域圖」の三葉の地圖が折り込まれていて、參照に便利である。

さて第一章は「小流氓」と題され、それが更に「小沙彌」「遊方僧」「逼上梁山」の三節に分れている。一三三八年の旱害の光景から說き起して、元璋が皇覺寺に入つて僧となり、更に諸方を流浪してその間に明教に接觸したこと、一三五一年における紅軍起義の次第と、元璋が之に參加する決意を定めたところまでが述べられている。此の間、明教についてやゝ詳しい說明があり、又、元朝支配の不合理性と苛刻さとを說いて、元帝國崩潰の原因を論じてある。

第二章「紅軍大帥」の第一節「小親兵」では、一三五二年元璋が濠州城下において郭子興配下の紅軍に投じて一兵卒となつたことから、子興の目にとまりその養女の婿となり、子興の爲に力を致したことが述べられている。次の「小軍官」では元璋が軍中において次々と功を建て、昇進して副元帥となるまでのことが書かれている。その間には、李善長を得たことや、多くの義子を收養した次第なども述べられてある。第三節「大元帥・大丞相」では、郭子興の死後、元璋が軍中の實權を握り、長江を渡つて應天に據り、着々勢力圈を擴大すると共に、內は農業生産の確保に務めたことが述べられる。こゝでは多數の學者を聘して、儒學的敎養を受け、そのことによつて讀書人の心を收拾すると共に、自らも亦思想的な變化を始めたこと、豪紳巨室の輩が元璋の武力に依つて彼等の地位を保たんとし、元璋も亦彼等との合作に意を用いたことが說明される。

第三章「從吳國公到吳王」の第一節は「潘陽湖決戰」で、西方の江西湖廣に據る陳友諒を敗つてその所領を併せたことが述べられている。その間に元璋は自ら吳王となつている。第二節「取東吳」は、やはり吳王と稱していた張士誠を敗り方國珍を降した經過が述べてあるが、その間には小明王韓林兒謀殺の一幕もある。こゝでは特に張士誠の罪狀を數えあげた檄文が、全文を載せて說明されている。この檄文の中で元璋が紅軍を罵倒して妖術妖言となし、儒家的色彩に滿ちていることが注意され、これと同時に徐州更民に對して出した宣諭と共に、元璋の生涯を二つにたちきるものだとされる。即ち前半生は貧農窮人の頭目であり、後半生は地主巨紳の保護人となつたというのである。第三節「南征北伐」では福建の陳友定を降し、なお元の支配下にあつた兩廣を收め、更に計を盡し力を竭して北伐の功を遂げ、最後に四川の明玉珍の夏國を亡して天下統一に至つた經過が述べられる。この節でも北方の官吏人民に告げる檄文を載せてその意義が指摘されているが、その中心思想は二點で、一は民族革命ということであり、その二は道統の復興卽ち舊來の文化的思想的系統の恢復ということである。一年前張士誠を討つた時の檄文に比べて、具体的積極的にこの二つのスローガンを提出したもので、元璋幕下の儒生群の勝利であり、又元璋の變化でもあると言われている。

第四章「大皇帝的統治術」の第一節「大明帝國和明敎」では、先

ず元璋が皇帝の位に即いた次第と、明という國號決定の由來、及び元璋の明教に對する態度が述べられている。明の國號は明教に由來するものであり、此の意味では元璋の部下の紅軍系の者の意を滿すに足りた。かつ又明という文字は、同時に儒家系統の者に對しても都合よき解釋を提供して彼等を滿足させた。しかし明教そのものに對しては、元璋は元末におけるその意義をよく知つていたから、一旦皇帝となると、嚴重に禁止してしまつた。尤も禁止必ずしもその廢絶を意味しないことはいうまでもない。第二節「農民被出賣了」では元璋の政治的才能が、帝國統治の上においていかに發揮されたかが述べられている。元末の戰亂に際して、元璋及び大部分の臣僚は農民出身であつたが、地主勢力の强大にして、統一の事業を達成するには彼等の協力を得なければならぬことを悟つた。そこで元璋は對地主二面政策をとつた。表向は學識聲望ある地主は官吏や糧長（徵稅人）に任じて官僚機構を建てしめた。勿論これには新貴族新官僚の地主が加わつている。この反面には、殘酷な手段を用いて非協力的な地主を除去した。その方法としては、徙民があり、又種々の政治的事件、胡惟庸案、藍玉案の類を借りて一網打盡にするという方法もあつた。政府の收入を增す爲には過去六百年間行われなかつた土地丈量を敢行し、人口調査を行つた。その結果歲入の糧額は元代に比して一倍半を加えた。戶口調査の結果は里甲が組織され、黃册が編造されたが、表面的には貧民に都合よいかの如くに見える制度も、實際には小農や佃農の利益は少しも顧みられなかつた。そして里甲の組織は、路引などの制度と相俟つて、全國的な特務網を形成していた。（著者によれば里甲組織の主なる任務はそれであつたというが、筆者の知る所では里甲制の主目的は徵稅にあつたというのが通念であり、果して特務網としての機能を充分果したものかどうか、考えてみる必要がある）。第三節「新官僚養成所」では、官僚機構の基盤として君主の意のまゝに動く新官僚を訓練する爲に設けられた國子監について述べてある。國子監の構成、學規、教課內容を明かにし、國子監が絕對服從、無思想、奴性の官僚を養成する機關であつたことが說明してある。但し洪武十五年以後は、科擧が行われ、官僚は主として進士が用いられることになり、監生立身の途は次第に困難になつた。こゝで地方の學校及び科擧の制度についても說かれているが、あらゆる面を通じて、君主の絕對權を承認する儒家的思想が浸透させられた。第四節は「皇權的輪子—軍隊」第五節は「皇權的輪子—新官僚機構」で、軍隊と官僚機構の二つが明帝國という車の兩輪だつたというわけである。特に後者については、隋唐以來の官制を回顧しつゝ、その變遷の趨向が皇權獨裁にあつたとし、元璋はこれを受けて更に意のまゝにし得る官僚機構を作り上げたとする。その要點は、地方にあつては元の行中書省の職權を削つて布政司を設け、中央では中書省を廢したことである。六部府院が直接皇帝に隸屬することになつた結果、君權と相權が一致し、これによつて皇權は極峯に達したというのが著者の說である。なお此の節では、宦官と吏員についても、若干の說明がある。第六節「建都和國防」では、金陵を帝都と定めた事情を述べ、これと關聯して國防特に北方邊疆の形勢と諸王分封のことが述べられている。第七節「大一統和分化政策」では、はじめに雲南の梁玉と東北の納哈出を討平したことを述べ、次いで多數の異民族を藩屬國とした次第が語られている。內地の土司も、小數異民族としてこゝでふれられている。

第五章「恐怖政治」の第一節は「大屠殺」と名づけられる。はじめに元璋が頗る酷刑を用いた事實を述べ、洪武の政治が名實相伴う恐怖政治であつたと斷定する。文武臣とも、多少とも勢力ある者は、皆何らかの言いがゝりをつけて斷罪せられた。その意味では胡惟庸の案も藍玉の案も一つのものである。これは子孫の爲に明室の脅威となるべき可能性ある者を除去したのであるが、酷刑とか恐怖政治とかいう現象的なことが强調されすぎた感がある。第二節「文字獄」では、洪武年間の文字の獄が、元璋の出身と學問に關する劣等感から出たものであるとして、これを說明している。第三節は「特務網」即ち檢校、錦衣衞等のスパイ政治について述べられている。なお此の點については近年丁易氏の詳細な「明代特務政治」の一書が出版されている。第四節「皇權的極峯」では、先にふれた元璋に至つて皇權が極峯に達したということについて、士大夫の地位が降下したということと、皇權に對する制限がうち破られたということと、此の二面について歷史的に說かれている。著者の表現によれば、明以前の士大夫は皇家と共存共治するものであつたが、明に至つては皇家の奴隸となつてしまつたのである。今一面たる皇權に對する制限のなくなつたことについても、中書省の廢止と、元璋が法を守らず、自らは法の上、法の外にあつたことが說かれ、暴君獨夫民賊の典型であると論斷されている。尤も此の部分はむしろ官僚士大夫との關係について說かれているので、獨夫民賊といつてもあまりピンと來ない憾みがある。人民に對する態度はその後で述べられる。一應人民をして安居樂業せしめるというのであるが、その根本は租稅收入を確保する爲で、卵を得る爲に雞をかうのと變らない。

最後の第六章「家庭生活」は、「馬皇后」「皇子皇孫」の二節で家族について述べられているが、第二節の末尾には、明朝の財政に大きな壓迫を與えた宗室俸祿の增加についてもふれてある。第三節「教養和性格」は元璋個人について論じてあるが、あらゆる學問宗教は彼の「皇座」を鞏固ならしめる爲に利用されたとして、儒家(文學・史學・經學を含む)、佛教、佛教などに對する態度を順次述べ、なおその他上來ふれられなかつた點にも二三言及されている。但し、狹い意味での性格に對する觀察は殆と見られない。むしろ最後の「晩年的悲哀」の中に見出される。そこでは、自分の建設した明王朝を維持する爲に心をくだいた元璋が、皇太子の死によつて打擊を受け、不安猜疑の內に世を去つたことが述べられている。

以上本書の內容を簡單に紹介したのであるが、總じて非常に史料に忠實であり、一々出所を註記し、重要な文書で史書に文字の異同あるもの—張士誠を討つ時の檄文などは、一々それを校合してある位である。しかしその反面、多少史實に溺れたというか、それがどういう意味を持つか、或は何故そうなつたかという點の考察に、物足らぬものを感じさせる。たとえば元璋が當初の農民的明教的な立場から、地主的儒教的な立場への轉換という問題も、事實としてはよく述べられていると思うが、どうしてそのような轉換が爲されたかについて、今一歩ふみこんだ說明が欲しい。又元璋が紅軍中において次第に頭角を現してきたことについては、彼自身の才能と、郭子興に認められたこととはいうまでもないが、なお人材の收養という點について、松本善海氏が明初の諸侯の出身地を調べて、同鄕出身者のグループが元璋勢力の中心になつているのではないかといつておられる(人物世界史—東洋)のを考え合すと、本書では元璋軍團の性格といつた點の考察が殆となく、漠然紅軍の一部隊として述

べられているような感じがするのである。又即位以後のことについていえば、元璋に至つて皇權が極峯に達したということを説明して、士大夫の地位が皇家の奴隷になり下つたということが述べられているのは、先程紹介したが、この點だけが强調されると、それでは一般人民と士大夫との關係はどうなのかという疑問が起つてくる。士大夫地主階級の形式的な皇帝への從屬性にも拘らず、より大きく見れば、むしろ皇帝と官僚地主階級の一体性、それと農民との對立關係ということの方が强調されるべきではなかろうか。獨夫民賊というような言葉も、人民に對する元璋の態度を、事實によつて裏附けてゆくのでなければ、宙に浮いてしまいそうである。概して本書では、人民の生活と直接關聯した面における元璋の政策といつた點では、他の面に比べると手薄の感があるのではなかろうか。

右はもとより筆者のなおこうもあればという望蜀の念を、思いつくまゝに記したにすぎず、これによつて本書の價値を聊かも傷つけるものではない。明代史に關心を有する者として、この篤實なる朱元璋傳の現れたことを喜び、敢て紹介の筆を取つた次第である。

（岩見　宏）

昭和二十七年度京大東洋史卒業生及び卒業論文題目

〔舊　制〕

唐代に於ける蠻族系名族の一形態——特に元氏長孫氏について　衛藤泰弘
の考察

三階教の布施觀　兼子秀利

巴蜀開國傳說についての一考察　狩野直禎

康有爲の歷史的な評價　中川貴

前漢時代の商工業者について——特にその社會的役割と抑商政策の意義　平山壯三

義和團事變について——清朝の崩壞と初期的ナショナリズムの展開として　堀田伊八郎

太平天國革命を必然ならしめた社會的條件に關する一考察　山田高吉

〔新　制〕

唐代禪宗の發展——四川の念佛禪　竺沙雅章